

かいこ てんさん 蚕と天蚕の違い

かいこ 蚕	てんさん 天蚕
 カイコガ 体長 約6cm 体重 4~5g	 ヤママユガ 体長 7~8cm 体重 17~20g
 繭 色 白色 直径 約3.5cm	 繭 色 黄緑色 直径 約5cm
 成虫 体長 1.6~2cm 翅開帳 4~5cm	 成虫 体長 3.7~4.5cm 翅開帳 12~15cm
 桑の葉	エサ クヌギやコナラなどの 広葉樹の葉
室内飼育 回数 年3~5回 日数 21~24日	屋外飼育 回数 年1~2回 日数 50~60日
 飼育方法 長さ 1300~1500m 値段 国産生糸 9円/g 輸入生糸 6円/g 特徴 • 織密性繊維 • 染料に染まりやすい	 糸 長さ 600~700m 値段 1000円/g 特徴 • 多孔質繊維 • 染料に染まりにくい

うわだんちく 上段地区の かいこ さま お蚕様

令和7年度
ミニ企画展(1)

7月には、実際に
カイコを飼い、
繭を作るまでの
ようすを見学でき
ます。



うわだんちく
上段地区で行なわれていた
養蚕の歴史について紹介します。



イベント

「繭から糸をとってみよう！」

日時 8/16(土)・9/7(日)

10:00 ~ 11:00

各日 定員6名(要申込)

材料費 300円

開館時間 9:30 ~ 17:00(入館は16:00まで)

休館日 祝日(7/21・8/11・9/15・9/23)

場所 立山町日中上野83

TEL 076-462-2387

2025
7/1 Tue -
9/30 Tue

立山町
歴史交流
ステーション
日なた

ようさん 養蚕とは？



養蚕とは、蚕を飼って繭をとることを言います。繭からとれる糸は生糸（絹）になります。5000年前に中国で始まり、日本へは弥生時代に伝わったとされています。明治から昭和初期には、外貨を得るための重要な輸出品になりました。農家にとって養蚕は、貴重な現金収入の手段であり、「おかいこさま」と呼ばれるほど特別な昆虫でした。

しかし、太平洋戦争や安価な化学繊維の普及、輸入絹織物の増加、後継者不足などが重なり養蚕農家は次第に姿を消してゆき、蚕は私達の身近な生き物ではなくなりました。

近年では、遺伝子組み換え技術により、新しい機能をもったシルクの開発や医療品を作る開発、新たな素材として活用する研究も進められています。

うわだんちく ようさん 上段地区の養蚕



上段地区では、養蚕が盛んに行われていました。旧上段役場に共同稚蚕飼育場があり、そこで、卵から2歳の大きさになるまで蚕を育て、3歳の大きさになると各養蚕農家に配布しました。繭になると、旧日中上野小学校の体育館に持ち寄り、岐阜県神岡町の製糸工場と半日かけて売買の取引をしました。

各養蚕農家の桑畑は、現在の立山町総合公園の場所にありました。自生の桑の葉を採って養蚕をしていた農家もいたそうです。昭和57年頃(1982)に、町制施行30周年記念事業として立山町総合公園が上段段丘において計画されたことにより、多くの養蚕農家が桑畑を手放しました。

てんさん 天蚕とは？



屋内で飼育する蚕を「家蚕」と呼ぶのに対して、屋外で飼育する蚕を「天蚕」と呼びます。山野に生息する「ヤママユガ」を屋外で飼育し、黄緑色の繭から糸を取ります。

天蚕は、とても繊細な生き物です。病気になりやすく、アリや鳥、猿などの動物に食べられたり、落ちてしまうと自力で木に登れず死んでしまいます。そのため、繭を作るまで飼育するのは至難の業です。

天蚕が盛んに行われていたのは長野県安曇野市です。富山県では、1980年代に蚕糸業の中心となっていた八尾町で始まりました。天蚕の糸は、美しい光沢と丈夫さから「繊維のダイヤモンド」と呼ばれ、国産生糸の100倍以上の値段で取引されます。

ふなみ 船見さんの かみせと

てんさん 上瀬戸での天蚕



天蚕に興味をもっていた船見さんが、八尾町で天蚕を始めたことを知り、飼育方法を教えてもらい上瀬戸で天蚕を始めました。

上瀬戸の借地の山で、最初はコナラの枝を取って来て、ハウスで水差し栽培飼育をしました。しかし、効率が悪く量が取れないと、山にクヌギの木を植えて屋外飼育をすることで、飼育数を増やしていました。

できた繭は、八尾町の山村特産指導所に持ち寄り、繭の品質や量に応じて売上金が支払われました。その他にも、船見さんが独自で業者や作家を訪ね、ボビンレースや服を作ってもらいました。

5年前にサルによって全滅してしまったのを期に、天蚕の飼育をやめてしまいました。